

一五分で描くトラウマ・マップ

一 はじめに

トラウマとは心的外傷、心の傷のことです。

この言葉が日本で一般的に使われるようになったのは、一九九五年の阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件以降のことです。これらの出来事のもたらした衝撃は大きく、

トラウマという概念が注目され、PTSD (Post Traumatic

Stress Disorder : 心的外傷後ストレス障害) という病名が紹介

されるようになりました。そして被災者や被害者、その遺族などへの「心のケア」の重要性が叫ばれるようになりました。その後は、大きな自然災害や事故、凶悪犯罪などが起きるたびに、トラウマ、PTSD、そして心の

ケアという言葉が当たり前のように用いられるようになっていきました。

宮地尚子

もともとトラウマは、英語で「身体の傷」を意味する言葉でしたが、サイコロジカル・トラウマ(精神的な外傷)という使い方がされるようになり、やがてトラウマという言葉単独で心の傷という意味に用いられることが多くなりました。けれども、今でも米国などではトラウマ・センターというと、交通事故などで負傷した人が運び込まれる救命救急センターを示す場合もあります。

本稿では、このトラウマという概念について説明しながら、トラウマと関わりの深い本(漫画や美術書を含む)を紹介しようと思います。タイトルに「トラウマ学」か「トラウマ研究」という言葉を使うべきか悩みましたが、

学問や研究というアプローチだけでは、トラウマのトラウマらしさが見えてこないように思うので、トラウマをめぐる書物の地図を描いてみることにしました。もちろん、トラウマという言葉を使っていなくても、トラウマの本質を描く書物は多くあり、本稿を読む方は、あれも入っていない、これも入っていないと思われることでしょう。また私の関心や好みに偏った選書になっていきます。ぜひ皆さんで、地図をより広くより豊かなものにしていってください。

二 ト라우マとは何か

前述のように、トラウマとは心の傷のことですが、もう少し詳しく言うと、過去の出来事によって心が耐えられないほどの衝撃を受け、なかば不可逆な影響を現在まで及ぼし続けるものとされています(厚生労働省PTSD研究班の二〇〇一年の報告書による)。

具体的には、多くの人にとって強い衝撃をもたらすような、日常では見られない出来事、例えば戦争・紛争、自然災害、犯罪、事故、拷問、人質、児童虐待、性暴力、

DV(ドメスティック・バイオレンス)、強制収容所体験などがトラウマティックな出来事とされ、その時と同じ恐怖や不快感を現在までもたらし続けるような場合、その精神的な影響がトラウマ反応とみなされます。

トラウマ反応として最もよく知られているのが、PTSDです。米国精神医学会の『精神疾患の分類と診断の手引き 第四版』(DSM-IV)によれば、PTSDは不安障害の一つとされ、生命や身体への脅威をもたらす「外傷的イベント」に遭遇し、強烈な恐怖と絶望的無力感を体験した後、(1)フラッシュバックや悪夢といった再体験症状、(2)事件を想起させるような刺激の回避や反応性の麻痺、感情の萎縮、(3)不眠、過度の警戒心、集中困難、驚愕反応など過覚醒症状、の三つを中心とした病像を呈するものをさしています。対人恐怖などのため、日常生活は大きく妨げられ、アルコールや薬物依存、自殺などにつながることも少なくないことが明らかになっています。

PTSDは米国において、ベトナム戦争帰還兵の研究をもとに、一九八〇年より一つの疾患概念として認知されるようになりました。けれど、それ以前にもフロイト

やジャネなどトラウマに注目し、記述をしていた専門家も少なくありません。そして二つの世界大戦が兵士にもたらした精神的影響を「戦争神経症」や「シェル(砲撃)ショック」として捉えたり、レイプ被害を受けた女性が共通して示しやすい症状をまとめた「レイプ・トラウマ・シンドローム」などの概念もすでに提出されています。PTSDはこれらを包括して捉えられるように概念化されましたが、PTSDの診断基準も、米国精神医学会の診断分類の改訂ごとに変遷があります。

実は、何がトラウマで何がそうでないのかを分ける境界線が明確にあるわけではありません。この曖昧さを排して、診断基準をマニュアル化し、操作的にトラウマを定義しようとしたのが、DSMの診断体系におけるPTSDだともいえます。これは「PTSDパラダイム」とも呼ぶことができます。パラダイムとはトマス・クーンによれば、「一定期間、科学に従事する者に対して、モデルとなる問いや答えを提供する普遍的に認められた科学的業績」です。パラダイムが確立すれば、専門家の基準が明確化し、研究は効率的に進みます。「基礎に立ち返ってまた繰り返す」ということをしなくても済

む」ようになり、論文が量産され、「通常科学」を進展させるわけです。

そして、PTSDは、原因とされる事件と個人の精神症状を因果関係として明確に結びつける疾患概念であるため、倫理的・法的責任を問われるのに用いられることが少なくなく、臨床現場を越えて議論を呼び起こしやすいという側面があります。例えば何か事件が起きたとき、臨床的には本人の訴えをもとに、さまざまな要因が症状に関与していると理解されます。けれども法的には、加害と被害の単純化や、その客観的証拠が求められるという違いがあり、齟齬を生んでしまうことが多々あるのです。例えば、性犯罪の被害者がトラウマに苦しみ、犯人を訴えようとしても、密室の中で何が起きたのかや、同意の有無を客観的に証明することが困難なため、立件されず、加害者が処罰されないことが多くあります。元従軍「慰安婦」問題などの歴史的事件においても、PTSDを理由とした賠償請求の訴えがなされていますが、その際にも何十年も前の証人の記憶がどこまで正確かということが疑問に付され、政治的な意図もあいまって請求却下という判断がされています。

ところで、トラウマをもたらす経験にはさまざまなものがあり、その病像も多様なあらわれ方をします。つまりトラウマは、PTSDという形だけであらわれるのではないのです。抑うつ症状、幻覚・妄想などの精神病様症状、身体症状などがあらわれる場合もあります。

特に、収容所体験やDVなど、慢性的にトラウマティックな状況に置かれていると症状は複雑になり、価値観や行動パターンなどにも影響を及ぼし、パーソナリティにも変化を及ぼします。また、小児期からの虐待の場合、肯定的な自己イメージをもったり、自己の感情を調整したり、安定した対人関係を築いていくための能力を発達させることが妨げられ、人格形成に大きな影響を与えていることが知られています。

こういったことから逆に、うつ病、解離性障害、境界性人格障害、摂食障害(拒食や過食・嘔吐など)、身体表現性障害(身体的な異常はないのに目が見えなくなったり、歩けなくなるなど、いわゆる「ヒステリー症状」といわれてきたもの)、薬物やアルコール依存症など、これまで多様な診断名を下されてきた人たちを、トラウマとの関連から見なおし、トラウマ反応の一種として症状を捉えなおす見方も

広まってきています。これは従来の精神疾患の診断体系をも揺るがせる可能性もっています。そして、このようにトラウマを深く探っていくと、暴力の連鎖や、被害と加害が必ずしもきれいに分けられないこと、アイデンティティの複雑性、出来事の責任主体の問題なども考えていかざるを得なくなります。

近年、生理学、脳神経科学や行動科学、発達心理学などの分野で、トラウマのメカニズムの解明は急速に進みつつあります。ここでは、脳内の海馬や扁桃体へのトラウマの影響と記憶のメカニズム、乳幼児期の養育者との愛着パターンと感情調整能力や解離症状の関係など、興味深い知見が生まれてきています。

こういったトラウマをめぐる研究の最前線は、心身二元論を突き崩し、理性と感情とがいかに密接に関連しているかなど、新しい人間の捉え方をもたします。そして人間が主体性を持ち、アイデンティティを確立していくためには、乳幼児期の養育者との安定した愛着関係がどれほど必要不可欠であるかということや、自己の感情を調整する能力が親密な他者との関係性や境界線を適切にもつためにいかに重要であるかということ、それら

がきちんと働かないことによって親密圏での暴力とトラウマの連鎖が起きたり(児童虐待やDVなど)、ジェンダー規範の再生産につながっていくことも明らかになりつつあります。そして社会的逸脱行為として、もっぱら倫理的・道徳的に捉えられてきたアディクション(嗜癖)や自傷、非行や他害行為などへも、深い理論的示唆を与えると考えられます。

では、今かいつまんで説明したトラウマとは何かというのを、より詳しく知るための手引書を紹介しましょう。日本語で読めるものに限ると、第一に挙げられるのが、ジュディス・L・ハーマン『増補版 心的外傷と回復』(中井久夫訳、みすず書房、一九九九年)でしょう。トラウマの本質を恐怖、孤立、離断と捉え、回復への道のりを安全、想起と服喪追悼、再結合という三段階に分けて細かく描いたこの本は、もはや古典としての位置を獲得しています。実は、トラウマやPTSDという言葉は、日本では一九九五年以前は精神科医など専門家にとってあまりなじみのないものでした。そのため、阪神淡路大震災の余波の強い時期に、そのまった中にあった当時神戸大学医学部精神医学教室の教授、中井久夫氏に

よって日本の専門家向けに訳されたのがこの本なのです。一九九六年の初版以降、この本は値段も専門書並み(としかそれ以上)であるにもかかわらず、多くの当事者にも読まれることになりました。これはハーマンが精神科医として臨床現場で、これまで一番声の聴かれることの少なかったDVや性暴力などの被害を受けた女性たちに耳を傾け、真摯に向き合い、暴力の背景にある社会構造や権力関係まで見据えながら、回復を支援してきた人であったからでしょう。多くの当事者が、自分のことをわかってもらえたという感覚を抱いたと同時に、回復への希望をそこに見いだしたのです。ハーマンは、一九世紀のヒステリー研究や、ホロコースト・サバイバーや兵士のトラウマなども詳しく取り上げ、トラウマという概念の歴史の変遷とその政治的文脈についても透徹した考察をおこなっています。また長期のトラウマがもたらす多彩な症状を包括して理解するために、複雑性PTSDという疾患概念を提唱しているのも特徴的です。

一方、この本の訳者の中井氏自身も著作が多数あり、いづれも味わい深いですが、例えば『徴候・記憶・外傷』(みすず書房、二〇〇四年)は、長年の臨床的観察を振り

返り、トラウマの徴候や、記憶とトラウマとの関係をめぐるであらためて考察をおこなっています。

精神保健の専門家向けの論集としては、ベセル・A・ヴァン・デア・コルク／アレキサンダー・C・マクファーレン／ラース・ウェイゼス編『トラウマティック・ストレス——PTSDおよびトラウマ反応の臨床と研究のすべて』（西澤哲監訳、誠信書房、二〇〇一年）もよいと思います。トラウマ全般を知るために、もう少しわかりやすいものとしては、小西聖子『増補新版 犯罪被害者の心の傷』（白水社、二〇〇六年）や、金吉晴編『心的トラウマの理解とケア 第2版』（じほう、二〇〇六年）があります。小西氏は日本のトラウマ臨床の第一人者で、特に犯罪被害を専門としており、金氏も厚生労働省のPTSD研究班の班長をしています。

子どものトラウマに関しては、レノア・テア『記憶を消す子供たち』（吉田利子訳、草思社、一九九五年）が古典といえるでしょう。児童虐待やいじめについては多くの本がありますが、よくまとまっているものとして、森田ゆり『子どもと暴力——子どもたちと語るために』（岩波書店、一九九九年）があります。アリス・ミラー『魂

の殺人——親は子どもに何をしたか』（山下公子訳、新曜社、一九八三年）は、ヒットラーの幼年時代を詳しく分析するなど、子どもの傷つきがもたらす長期的影響を鋭く探っています。

トラウマ反応の中でも複雑でわかりにくく、誤解されやすい、けれども重要なものとして解離症状というものがあります。これは自我の統合性が薄れ、離人感や健忘、記憶喪失などの症状を示したり、極端な場合は人格がいくつかに分かれる状態のことを示しています。解離について理解したい人は、フランク・W・パトナムの『多重人格障害』（安克昌・中井久夫訳、岩崎学術出版社、二〇〇〇年）と『解離——若年期における病理と治療』（中井久夫訳、みず書房、二〇〇一年）がおすすです。また近年再評価されている、ピエール・ジャネ（例えば、松本雅彦訳『心理学的医学』みず書房、一九八一年）や、シャンドール・フェレンツイ（例えば、森茂起訳『臨床日記』みず書房、二〇〇〇年）などの古典を読んでみるのもいいでしょう。岡野憲一郎『心のマルチ・ネットワーク』（講談社、二〇〇〇年）や、柴山雅俊『解離性障害——「うしろに誰がいる」の精神病理』（筑摩書房、二〇〇七年）も一般の人向けに書かれ

た良質の入門書です。

リストカットなどの自傷行為も、トラウマと関連していることが、まだ完全に解明されているわけではありませんが、臨床的にはよく知られています。自傷については、アルマンド・R・ファヴァツァ『自傷の文化精神医学——包囲された身体』（松本俊彦訳、金剛出版、二〇〇九年）や、林直樹『リストカット——自傷行為をのりこえる』（講談社、二〇〇七年）、ステイーブン・レベンクロン『CUTTING』森川那智子訳、集英社文庫、二〇〇五年）などが参考になるでしょう。

トラウマを人文学的な視点から見たものとしては、キャシー・カールス編『トラウマへの探究——証言の可能性と可能性』（下河辺美知子監訳、作品社、二〇〇〇年）が重要です。キャシー・カールスの単著『トラウマ・歴史・物語』（下河辺美知子訳、みすず書房、二〇〇五年）もよく知られています。人文・心理学系の論集では、森茂起編『埋葬と亡霊——トラウマ概念の再考』（人文書院、二〇〇五年）もよいと思います。森茂起氏の単著『トラウマの発見』（講談社、二〇〇五年）も、トラウマ概念の歴史の変遷とその背景を知りたい人には有用でしょう。

PTSDが米国で診断概念として採用されるに至った歴史的・政治的背景については、アラン・ヤング『PTSDの医療人類学』（中井久夫ほか訳、みすず書房、二〇〇一年）の詳しい分析があります。アンリ・エランベルジェ（エレンベルガー）の著作集（全三巻、中井久夫訳、みすず書房、一九九九～二〇〇〇年）や『無意識の発見——力動精神医学発達史』（上・下、弘文堂、一九八〇年）も興味深いです。

三 傷を抱えて生きる

トラウマには、ある種の圧倒性があります。それは言語化を拒んだり、比較や分類、相対化を拒むものでもあります。そういう意味でも、当事者による証言や記述はとても重要です。傷を負うということは、傷を抱えながらその後の人生を生きるということでもあります。たとえPTSDにならなくても、症状が回復したとしても、傷の記憶が消えるわけではなく、愛する人や安全な生活、自他を含む人間への信頼など、失ったものが戻ってくるわけではないことが往々にしてあるからです。

ナチによるユダヤ人ホロコーストのトラウマについ

ては、生還者による証言がたくさん翻訳されています。ヴィクトール・E・フランクルやジャン・アメリー、エリ・ヴィーゼルなども重要ですが、私はとくに『新装版 パウル・ツェラン詩集』（飯吉光夫訳編、思潮社、一九九二年）が好きです。好きというのは語弊があるかもしれませんが。ツェランは初期の頃の詩集の方がホロコーストの苦悩を伝えるものとして有名ですが、どんどん透明度を増していく後期の詩集こそ、美しいだけに、痛みが強く刻まれているような気がします。ブリーモ・レーヴィ『溺れるものと救われるもの』（竹山博英訳、朝日新聞社、二〇〇〇年）もおすすめです。収容所での苦しい生活を生き延びた強さと、生き延びたゆえに追いかけてくる傷や罪悪感が、そこには深く描かれています。

性暴力については、『ベルリン終戦日記——ある女性の記録』（アントニー・ビーヴァー序文、ハンス・マグヌス・エントゥエンズベルガー後記、山本浩司訳、白水社、二〇〇八年）をまず挙げましょう。匿名著者の日記ですが、終戦後の悲惨な状況を女性が生き延びることの、リアルな意味を教えられます。聡明で勇気があり、記者として書く力をもつ女性が、生き証人として、性暴力被害を含

め、自身の体験について鮮明で誠実な記録を残してくれたことに感謝したいと思います。小林美佳『性犯罪被害にあうということ』（朝日新聞出版、二〇〇八年）は、まだまだ性被害者へのステイグマ（偏見）の強い日本で著者が実名と写真を公表したことで話題になりましたが、被害とその後苦しみを余すところなく描いており、にもかかわらず読後感がさわやかです。出版から一年の間に著者は二〇〇〇人以上から連絡を受け、その半数以上は被害当事者とのことで、孤立してきた被害者たちがこの本から大きな救いを得ていることがわかります。一方、二九歳で夭逝した菜摘ひかるの一連の本、例えば『菜摘ひかるの私はカメになりたい』（角川文庫、二〇〇一年）は風俗嬢の日常を描いたものとして注目を浴びましたが、私には多くの傷を抱えながら必死で生き延びようとしてきた女性の姿が痛々しく映ります。逆に、田中美津『かけがえのない、大したことのない私』（インパクト出版会、二〇〇五年）は、日本の一九七〇年代のウィメンズ・リブを率い、現在は鍼灸師をしている著者の、傷と決して無縁ではない、けれども力強くしなやかな生き様を描き出しています。

病いというテーマでは、東京HIV訴訟原告団『薬害エイズ原告からの手紙』（三省堂、一九九五年）は、トラウマという言葉は使われていませんが、まさに薬害エイズがもたらした傷を第一人称で描いていると思います。精神障害については、浦河べてるの家『べてるの家の「当事者研究」』（医学書院、二〇〇五年）が興味深いです。精神障害者として他律的に扱われてきた人たちが、「当事者研究」をすることで、自らの症状や苦しみを消し去るのではなく主体的に悩めるようになるというのは、回復への大きな逆説のような気がします。身体障害や身体疾患がもたらすトラウマとそれを物語ることの意味については、アーサー・W・フランク『傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理』（鈴木智之訳、ゆみる出版、二〇〇二年）が参考になるでしょう。学術書ですが、著者自身の経験が起点となっており、当事者研究の一つといえるかもしれません。綾屋紗月・熊谷晋一郎『発達障害当事者研究』（医学書院、二〇〇八年）や、熊谷晋一郎『リハビリの夜』（医学書院、二〇〇九年）も、おすすめです。

バリー・M・コーエン／エスター・ギラー／リン・W編著『多重人格者の心の内側の世界——154人の

当事者の手記』（宮地尚子監訳、作品社、二〇〇三年）は、トラウマと解離の関係を当事者の内面から照らし出したものです。当事者研究という点、ダルク女性ハウス当事者研究チーム「なまみーず」編『Don't you? ～私もだより～からだのことを話してみました』（特定非営利活動法人ダルク女性ハウス、二〇〇九年）も画期的だと思います。写真もたくさん入っておりカラフルで読みやすいブックレットです。薬物に限らず依存症の人たちは、子どもの頃虐待を受けるなどトラウマ体験をもつことが多く、その痛みから逃れるため自己処方的に依存に陥ることが多いことが知られています。特に薬物依存の女性は、子どもの頃からネグレクト（育児放棄）や身体的・性的虐待の被害を受けていることが多く、依存症になってからもさらに被害を受けることが多いのですが、社会一般からは犯罪者という厳しい目で見られています。けれども、薬物依存から回復中の女性たちが、思うとおりにならない自分たちの身体に向き合ったこの本は、依存症の人だけではなく、生きづらいと感じている人に共感を与えるのではないかと思います。

砂川秀樹・ROYJI編『カミングアウト・レター

ズ」(太郎次郎社エディタス、二〇〇七年)は同性愛について、当事者と親や学校の先生などとの往復書簡集です。このほか紹介したいものは数えきれませんが、金石範・金時鐘『なぜ書きつづけてきたかなぜ沈黙してきたか—— 濟州島四・三事件の記憶と文学』(平凡社、二〇〇一年)、宮城晴美『新装版 母の遺したモノ—— 沖繩・座間味島「集団自決」の新しい事実』(高文研、二〇〇八年)、濱谷正晴『原爆体験—— 六七四四人・死と生の証言』(岩波書店、二〇〇五年)、ハスラー・アキラ『売男日記 nobody can live alone』(イッシンプレス、二〇〇〇年)なども貴重な記録だと思います。

四 傷ついた人のそばにたたく

傷を抱えた人が希望をもって生き続けるには、周囲の人々とのポジティブな関わりが必ず必要です。安克昌『心の傷を癒すということ』(角川文庫、二〇〇一年)は、阪神淡路大震災の時、神戸大学医学部で精神医学教室の医局長をしていた著者の、そのまったただ中での活動記録です。自身も被災しながら、住民や患者さんをサポートし、

心の傷が癒やされやすい社会のあり方にも言及するというトラウマ・ケアの原点が描かれています。彼は実は震災の前から、トラウマに関心をもち、その中でも重度とされる解離性同一性障害(いわゆる多重人格)を中心に臨床・研究を重ねていました。そして二〇〇〇年末に病気で亡くなりながら、臨床の世界で今も多くの人たちに影響を与えています。『治療の聲』第九巻一号「特集 安克昌の臨床世界」(星和書店、二〇〇九年)からは、彼の多面性をそのままいろいろな人が受け継ぎ、発展させている様子が見えがええます。彼からの応答を聞けないのが、とても残念ではありますが。

傷ついた人のそばにたたくことは、予想以上に体力を消耗します。周囲の無理解により当事者がさらなる外傷(再外傷・二次被害)を受けることも少なくありませんが、一方で周囲の人たちも時に「被爆」をします。そういった傷つきは「代理外傷」や「二次的外傷」と呼ばれ、B・H・スタム編『二次的外傷性ストレス—— 臨床家、研究者、教育者のためのセルフケアの問題』(小西聖子・金田ユリ子訳、誠信書房、二〇〇三年)にその詳細が書かれています。「感情労働」という視点から援助職者のストレ

スを捉えた、武井麻子『ひと相手の仕事はなぜ疲れるのか——感情労働の時代』（大和書房、二〇〇六年）も興味深いです。

拙著『環状島——トラウマの地政学』（みすず書房、二〇〇七年）は、トラウマを語る／語らないこととその条件、被害者と支援者、被害者間や支援者間の力動や、専門家の役割などについて分析・考察したものです。それに続く『傷を愛せるか』（大月書店、二〇一〇年）は、傷を抱えた人のそばにたたくむことの意味をエッセイという形で描いたものです。

このほか、アーサー・クラインマン『病いの語り——慢性の病いをめぐる臨床人類学』（江口重幸ほか訳、誠信書房、一九九六年）、森岡正博『33個めの石——傷ついた現代のための哲学』（春秋社、二〇〇九年）、鷲田清一『「待つ」ということ』（角川選書、二〇〇六年）、ハンセン病違憲国賠訴訟弁護団『開かれた扉——ハンセン病裁判を闘った人たち』（講談社、二〇〇三年）などもよいと思います。

エレン・バス／ローラ・デイビス『新装改訂版 生きる勇氣と癒す力——性暴力の時代を生きる女性のためのガイドブック』（原美奈子・二見れい子訳、三一書房

二〇〇七年）、リチャード・B・ガートナー『少年への性的虐待——男性被害者の心的外傷と精神分析治療』（宮地尚子監訳、作品社、二〇〇五年）、拙著『医療現場におけるDV被害者への対応ハンドブック——医師および医療関係者のために』（明石書店、二〇〇八年）などが、治療的なアプローチとしては参考になるでしょう。

五 社会と傷の記憶

トラウマは個人の精神心理・病理として捉えられがちですが、いうまでもなく戦争、犯罪、事件などの社会的事象と密接につながっています。日本の近現代に限っても、いくつかの戦争、広島・長崎への原爆投下、東京大空襲、周辺国の植民地化、沖縄と軍事基地、水俣病、ハンセン病者の隔離政策、地震や台風などの自然災害、飛行機墜落事故や電車事故、交通事故、無差別殺人などなど、数えきれない出来事があり、心に傷を負いながら生きてきた人たちもまた無数にいます。社会科学からのトラウマへのアプローチは今後重要となると思われますが、分析はまだ緒についたばかりです。

歴史的な事件がもたらした集合的記憶とアイデンティティやナシヨナリズムとの関係、メディアでの表象による感情操作や動員のあり方、トラウマ体験の言語化不可可能性と証言や記録・歴史資料の確保やその扱い方、オール・ヒストリーの手法などがもつ可能性と限界、差別やマイノリティ体験とトラウマとの関係、ジェンダーによる差異など、重要な探求課題が山積しているといえるでしょう。

また、現在の精神医学や心理学のトラウマへのアプローチは、病理の個人化、医学化、脱政治化の傾向を強くもっています。社会の悲惨な出来事が個々人の精神にもたらす深い影響への気づきを促すためにも、トラウマという概念は重要です。けれども医学的研究が進むにつれ、トラウマは「異常な体験への正常な反応」だという捉え方だったのが、罹患しやすい個人の脆弱性へ注目がシフトしてきています。実際PTSDを発症する個人は限られており、一年後の有病率が事件や事故で五〇パーセント、レイプで四〇〜六〇パーセントといわれています。そこでは時間による自然な回復や個々人のレジリエンス(復元力)が働くといわれています。けれども回

復は、その人がどのような社会に受け入れられていくかによっても大きく左右されます。これらについて、科学的な側面から批判的に見ていく視点も必要でしょう。トラウマの予防やトラウマからの回復は社会全体で考えなければいけない問題であり、人間がもつ普遍的な脆弱性とどう向き合っていくのか、という深い倫理・哲学的な問題もそこから喚起されるでしょう。

こういった、社会や文化という側面からトラウマを扱ったものとしては、拙著『トラウマの医療人類学』(みずが書房、二〇〇五年)が役に立つのではないかと思えます。編著の『トラウマとジェンダー——臨床からの声』(金剛出版、二〇〇四年)は、トラウマとジェンダーとの関係を分析した論集です。同じく編著の『性的支配と歴史——植民地主義から民族浄化まで』(大月書店、二〇〇八年)は性暴力の問題を通文化的、歴史的、構造的に捉えてみようとした論集です。

坂上香『癒しと和解への旅——犯罪被害者と死刑囚の家族たち』(岩波書店、一九九九年)は、米国で犯罪後の被害者遺族と死刑囚の家族がともに旅をする過程を追ったもので、社会的な癒しや償い、和解のあり方を深く考

えさせられます。北村毅『死者たちの戦後誌——沖繩戦跡をめぐる人びとの記憶』(御茶の水書房、二〇〇九年)は、沖繩の歴史的な傷と記憶を、膨大な資料から浮き彫りにしています。川田文子『赤瓦の家——朝鮮から来た従軍慰安婦』(ちくま文庫、一九九四年)も重要なルポルタージュです。

マリタ・スターケン『アメリカという記憶——ベトナム戦争、エイズ、記念碑的表象』(岩崎稔ほか訳、未来社、二〇〇四年)や、ケネス・E・フット『記念碑の語るアメリカ——暴力と追悼の風景』(和田光弘ほか訳、名古屋大学出版会、二〇〇二年)は社会がいかに戦争や暴力によってもたらされた傷を扱うか、歴史的記憶としてどう残すか(または残さないか)を分析しています。類似の関心をもつものとして、生井英考『負けた戦争の記憶——歴史のなかのヴェトナム戦争』(三省堂、二〇〇〇年)、白井洋子『ベトナム戦争のアメリカ——もう一つのアメリカ史』(刀水書房、二〇〇六年)もあります。アーノルド・ミンデル『紛争の心理学——融合の炎のワーク』(永沢哲監修、青木聡訳、講談社現代新書、二〇〇一年)は、紛争の解決にワールドワークというものを考案し、世界のあちこ

ちで活動をおこなっている著者によるもので、ランクとといった概念が重要だと思っています。そこにも社会がトラウマとどう向き合うべきか、敵味方という対極にありながら、双方とも傷ついた者同士がどうすればさらに傷つけ合わずにすむようになるのかという、思考と知恵が見られます。

ところで、PTSDという言葉ができて三〇年、トラウマという言葉が日本で広まってまだ一五年しか経っていないわけですが、もちろんトラウマ的な出来事がそれまでになかったわけでも、心に傷を負った人がいなかったわけでもありません。世界では奴隷制や新大陸征服、人種差別、植民地支配、世界大戦、民族虐殺など悲惨な出来事が繰り返されてきました。トラウマという言葉は使われていますが、これらの出来事や人々についても多くのことが書かれてきました。

例えば、フランツ・ファノンの『黒い皮膚・白い仮面』(海老坂武・加藤晴久訳、みすず書房、一九九八年)と『地に呪われたる者』(鈴木道彦・浦野衣子訳、みすず書房、一九九六年)や、W・E・B・デュボイス『黒人のたましい』(黄寅秀訳、岩波書店、一九九二年)は、現在のトラウ

マ研究の主流とはいえませんが、間違いなく古典です。デュボイスの「二重意識」の概念は、トラウマの文脈からも再評価されるべきでしょう。グレゴリー・ベイトソン『普及改訂版 精神と自然——生きた世界の認識論』（佐藤良明訳、新思索社、二〇〇六年）の「ダブル・バインド」概念も然りです。また、アーヴィング・ゴッフマンの『改訂版 ステイグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』（石黒毅訳、せりか書房、二〇〇一年）なども、トラウマを社会的側面から深く掘り下げるために読み直されるべきでしょう。

六 希望をつなぐ——文学・アートのカ

トラウマの生物学的なメカニズムは現在解明されつつあります。けれども、生物学的な理解では接近できないような切迫さがトラウマにはあります。そして、文学や芸術作品の中には、精神医学的記述よりも鮮明にその切迫さを表現しているものが多くあります。文学やアートという形で自己の傷を昇華させ、生き延びる希望を得ている人も少なくありません。当事者の証言とはまた異なる

これらの作品を味わい、トラウマへの理解を深めてみてください。

例えば、天童荒太『包帯クラブ』（ちくまプリマー新書、二〇〇六年）はどうでしょうか。傷を見つめ、手当てをすることの意義をティーンエイジャー向けに生き生きと描いています。虐待と子どもの無力さ、逃げるという希望、複雑な傷が網の目のように絡む様子を、人魚というメタファーを利かせて描いた桜庭一樹『砂糖菓子の子の弾丸は撃ちぬけな』——A lollypop or a bullet』（角川文庫、二〇〇九年）もいいでしょう。乙一の短編集『失はれる物語』（角川文庫、二〇〇六年）には人から人に傷が移る話などが収録されていて、触感感が満点です。エイミー・ベンダー『燃えるスカートの少女』（菅啓次郎訳、角川文庫、二〇〇七年）も短編集で、その中の「癒す人」はトラウマを寓話的に捉えた珠玉の作品だと思います。ブルック・ステイヴンズ『タトゥー・ガール』（細美遥子訳、講談社文庫、二〇〇四年）は、全身に鱗のタトゥーを入られた少女が主人公なのですが、重い傷のメタファーとして痛すぎるほど鮮烈だと思います。後半は非現実的な脱出劇になってしまっていますが、前半部分の、周囲の人々が少女に引

きつけられていく様子や、患者の症状が自分にうつってしまふ特異体質をもつ医者が印象的です。このほか、東峰夫『オキナワの少年』（文春文庫、一九八〇年）、梨木香歩『西の魔女が死んだ』（新潮文庫、二〇〇一年）なども興味深いです。

『鉄の時代』（くぼたのぞみ訳、河出書房新社、二〇〇八年）などJ・M・クッツェーの一連の作品は、南アフリカの人種差別政策がもたらした社会や個人への深い傷痕、アパルトヘイトが撤廃された後もその負の遺産として吹き荒れる暴力を、乾いた筆致で描いています。J・M・G・ル・クレジオの一連の作品はアフリカや南米を舞台に、柔らかな視線で社会の傷を見つめ、描いているように思います。トラウマについて書かれたものではありませんが、アフリカで医師をしていた父親をめぐるメモワール『アフリカの人——父の肖像』（菅野昭正訳、集英社、二〇〇六年）は、彼の原点を示しているようで、異国の風景なのに読み返すとどこかつかしくなる作品です。トニ・モリソンの作品には、米国の奴隷制時代に生きる黒人の傷と記憶が描かれます。その差し迫る筆致は、文字を学ぶ機会さえ与えられず、心身ともに傷つけられ、簡

単に殺され、それでも次世代に生命を紡ぎ続けた人々が、まるで憑衣したかのようです。エドゥアール・グリッサン『〈関係〉の詩学』（管啓次郎訳、インスクリプト、二〇〇〇年）もおすすりめです。

「二トラウマとは何か」で挙げた当事者の証言や自伝に近いものとしては、石牟礼道子『新装版 苦海浄土——わが水俣病』（講談社文庫、二〇〇四年）、バオ・ニン『戦争の悲しみ』（井川一久訳、めるくまーる、一九九七年。池澤夏樹Ⅱ個人編集『世界文学全集1-6』河出書房新社、二〇〇八年にも収録）や、ティム・オブライエン『本当の戦争の話をしよう』（村上春樹訳、文春文庫、一九九八年）などがあります。敵味方としてですが、同じ土地で戦った兵士たちの記録として、バオ・ニンとティム・オブライエンを読み比べてみるのもいいでしょう。ジャングルのむっとした熱気と火薬の臭いが立ちこめてきそうです。文学作品と社会との関わりについては、苦悩の歴史の中でも日常生活を丁寧に着もうとするパレスチナの人たちと文学の価値についての岡真理『アラブ、祈りとしての文学』（みすず書房、二〇〇八年）や、沖縄の傷が現地と日本本土でどのように文学作品の中に描かれているの

かを分析したマイク・モラスキー『占領の記憶／記憶の占領——戦後沖縄・日本とアメリカ』（鈴木直子訳、青土社、二〇〇六年）などを読んでみてもよいでしょう。

漫画については、名作といえるのが、広島島の被爆女性を描いた、こうの史代『夕風の街桜の国』（双葉社、二〇〇四年）です。彼女の目に映るものこそ、傷の風景にほかならないと思います。成田美名子の『Cipher』（全七巻、白泉社文庫、一九九七年）や、羅川真里茂『赤ちゃんと僕』（全一〇巻、白泉社文庫、二〇〇一～二〇〇二年）、くらもちふさこ『おしゃべり階段』（集英社文庫、一九九六年）、槇村さとの『イマジン』（全七巻、集英社文庫、二〇〇二年）なども私の好きな作品です。槇村さとは『イマジン・ノート』（集英社文庫、二〇〇二年）で父親からの性的虐待を思い出し、その記憶と格闘する中で作品を生み出していった経過を記しており、いかに創造的な仕事が傷から生まれるのか、そして創造することによっていかに傷の先を生きていけるのかを示していると思います。このほか萩尾望都や竹宮恵子なども素晴らしい作品を途切れることなく描いてきました。日本の少女漫画の豊かさは、女性の社会進出が限られていた時代に、才能を発揮でき

る数少ない場として、少女漫画界が存在していたことが大きいといえるでしょう。

アート作品としては、何よりも挙げたいのが『YES オノ・ヨーコ展 カタログ』（朝日新聞社、二〇〇三年）です。彼女は人が傷つくとはどういうことかを確実に知り、だからこそ傷の連鎖する哀しさを、傷を抱えるからこそ感じる優しさ・美しさを、作品にミニマムな形で示している気がします。私は以前、彼女の作品はサイコ・セラピューティックだと書いたことがありますが、受け身の癒やしとは違い、作品と向き合うことで自分の内側から湧き出る力を感じてみてください。入手しやすいものとしては『グレイプフルーツ・ジュース』（南風権訳、講談社文庫、一九九八年）などもあります。ほかに、マルレーネ・デュマスの作品、例えば『マルレーネ・デュマス ブロークン・ホワイト』（東京都現代美術館・丸亀市猪熊弦一郎現代美術館監修、淡交社、二〇〇七年）も、人間の弱さと強さを同時にあらわしており、かつ人種や文化、ジェンダーの壁をさりげなく、けれど大胆に越えていていると思います。ロスコヤクレーの抽象画も、作品の前にただたたずむことで、心の中の傷が浮き彫りにされ、

ありのまま受けとめられるような感じを受けるのではないでしようか。アート作品の評論、徐京植『ディアスポラ紀行——追放された者のまなざし』（岩波新書、二〇〇五年）は、自身の傷を抱えながらの旅の記憶でもあり、胸をつかれます。

写真集では、例えばナン・ゴールドフィン『悪魔の遊び場』（ファイドン、二〇〇五年）が、薬物依存やHIV/AIDSを抱えて生きる人たちを生々しく、けれども敬意と親しみのこもった視線で捉えています。セバステイアン・サルガードの作品は、亡命や移住、労働などがもたらす傷つきと同時に、それでも生き続ける人間の生命力をあらわしています。例えば『人間の大地労働——セバステイアン・サルガード写真集』（今福龍太訳、岩波書店、一九九四年）などです。石内都『Scars』（着穹舎、二〇〇五年）は、傷そのものを写しながら、それ以上ものが映し出されていると思います。

七 最後に

書いてみると、ほかにも過去に読んだ素晴らしい本が

どんどん思い出されてきましたが、自制してこのあたりでやめましょう。

トラウマは、人間が傷つくものだという当たり前の事実を見つめ、そういう人間の弱さに直面することの重要性を教えてくれます。トラウマは放置され忘れ去られたように見えても、しばしば世代を超えて連鎖していきます。時間が薬、というのは間違いではありません。ただそれは安全な場所が確保され、周囲から傷つきを認められ、手当てを受け、温かく見守られることによって癒えていくのです。本はそういう安全な場所と時間をつくり出すことを可能にします。本がこれからも、そういった欠かせない役割を果たし続けていくことを願っています。

宮地尚子（みやじ・なおこ）

一橋大学大学院社会学研究科教授。精神科医師、医学博士。専門は文化精神医学、医療人類学、ジェンダーとセクシュアリティ。

15分で描くトラウマ・マップ ブックガイド

出版社	ISBN(978)	書名	著者名	本体価格	刊行
みすず書房	4622041139	増補版 心的外傷と回復	ジュディス・L・ハーマン (中井久夫訳)	6,800	1999
みすず書房	4622070740	徴候・記憶・外傷	中井久夫	3,800	2004
誠信書房	4414402865	トラウマティック・ストレス	ベセル・A・ヴァン・デア・コルク／アレキサンダー・C・マクファーレン／ラース・ウェイゼス編(西澤哲監訳)	8,500	2001
白水社	4560049778	増補新版 犯罪被害者の心の傷	小西聖子	1,800	2006
じほう	4840735438	心的トラウマの理解とケア 第2版	金吉晴編	2,200	2006
草思社	4794206381	記憶を消す子供たち	レノア・テア(吉田利子訳)	2,300	1995
岩波書店	4000228046	子どもと暴力	森田ゆり	2,000	1999
新曜社	4788501737	魂の殺人	アリス・ミラー(山下公子訳)	2,800	1983
岩崎学術出版社	4753300129	多重人格性障害	フランク・W・パトナム(安克昌・中井久夫訳)	8,000	2000
みすず書房	4622041252	解離	フランク・W・パトナム(中井久夫訳)	7,600	2001
みすず書房	4622023203	心理学的医学	ビエール・ジャネ(松本雅彦訳)	3,600	1981
みすず書房	4622041177	臨床日記	シャンドール・フェレンツイ(森茂起訳)	5,200	2000
講談社	4061495197	心のマルチ・ネットワーク	岡野憲一郎	660	2000*
筑摩書房	4480063830	解離性障害	柴山雅俊	700	2007
金剛出版	4772410724	自傷の文化精神医学	アルマンド・R・ファヴァッツァ(松本俊彦訳)	6,800	2009
講談社	4062879125	リストカット	林直樹	700	2007
集英社文庫	4087604795	CUTTING	スティープン・レベンクロン(森川那智子訳)	618	2005
作品社	4878933516	トラウマへの探究	キャシー・カルース編(下河辺美知子監訳)	3,800	2000
みすず書房	4622071099	トラウマ・歴史・物語	キャシー・カルース(下河辺美知子訳)	2,800	2005
人文書院	4409340288	埋葬と亡霊	森茂起編	2,500	2005
講談社	4062583213	トラウマの発見	森茂起	1,500	2005
みすず書房	4622041184	PTSDの医療人類学	アラン・ヤング(中井久夫ほか訳)	7,000	2001

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体価格	刊行
みすず書房	4622041214	エランベルジェ 著作集 1	アンリ・エランベルジェ (中井久夫訳)	6,000	1999
みすず書房	4622041221	エランベルジェ 著作集 2	アンリ・エランベルジェ (中井久夫訳)	6,000	1999
みすず書房	4622041238	エランベルジェ 著作集 3	アンリ・エランベルジェ (中井久夫訳)	6,600	2000
弘文堂	4335650260	無意識の発見(上)	アンリ・エランベルジェ	5,600	1980
弘文堂	4335650277	無意識の発見(下)	アンリ・エランベルジェ	6,600	1980
思潮社	4783728191	新装版 パウル・ツェラン詩集	パウル・ツェラン (思飯吉光夫訳編)	1,942	1992
朝日新聞社	4022574916	溺れるものと救われるもの	プリーモ・レーヴィ (竹山博英訳)	2,800	2000
白水社	4560092088	ベルリン終戦日記	アントニー・ビーヴァー序文、ハンス・マグヌス・エンツェンスベルガー後記 (山本浩司訳)	2,600	2008
朝日新聞出版	4022504210	性犯罪被害にあうということ	小林美佳	1,200	2008
角川文庫	4043635016	菜摘ひかるの私はカメラになりたい	菜摘ひかる	362	2001*
インパクト出版会	4755401589	かけがえのない、大切なことのない私	田中美津	1,800	2005
三省堂	4385356570	薬害エイズ原告からの手紙	東京HIV訴訟原告団	1,455	1995*
医学書院	4260333887	べてるの家の「当事者研究」	浦河べてるの家	2,000	2005
ゆみる出版	4946509292	傷ついた物語の語り手	アーサー・W・フランク (鈴木智之訳)	2,800	2002
医学書院	4260007252	発達障害当事者研究	綾屋紗月・熊谷晋一郎	2,000	2008
医学書院	4260010047	リハビリの夜	熊谷晋一郎	2,000	2009
作品社	4878934469	多重人格者の心の内側の世界	バリー・M・コーエン / エスター・ギラー / リン・W 編著 (宮地尚子監訳)	3,600	2003*
特定非営利活動法人ダルク女性ハウス	4990480202	Don't you? ~私もだよ~ からだのことを話してみました	ダルク女性ハウス当事者研究チーム「なまみず」編	1,200	2009
太郎次郎社エディタス	4811807256	カミングアウト・レターズ	砂川秀樹・RYOJI編	1,700	2007
平凡社	4582454260	なぜ書きつけてきたかなぜ沈黙してきたか	金石範・金時鐘	2,400	2001

出版社	ISBN(978)	書名	著者名	本体価格	刊行
高文研	4874983942	新装版 母の遺したもの	宮城晴美	2,000	2008
岩波書店	4000227421	原爆体験	濱谷正晴	2,800	2005
イッシプレ ス	4900398351	売男日記	ハスラー・アキラ	1,200	2000 版元直
角川文庫	4043634019	心の傷を癒すということ	安克昌	600	2001*
誠信書房	4414402957	二次的外傷性ストレス	B・H・スタム編(小西聖子・ 金田ユリ子訳)	4,500	2003
大和書房	4479761488	ひと相手の仕事はなぜ 疲れるのか	武井麻子	1,500	2006
みすず書房	4622073390	環状島 = ト라우マの地 政学	宮地尚子	2,800	2007
大月書店	4272420124	傷を愛せるか	宮地尚子	2,000	2010
誠信書房	4414429107	病いの語り	アーサー・クラインマン(江 口重幸ほか訳)	4,200	1996
春秋社	4393332917	33個めの石	森岡正博	1,500	2009
角川選書	4047033962	「待つ」ということ	鷺田清一	1,400	2006
講談社	4062118767	開かれた扉	ハンセン病違憲国賠訴訟弁 護団	1,800	2003*
三一書房	4380072031	新装改訂版 生きる勇気 と癒す力	エレン・バス/ローラ・デ イビス(原美奈子・二見れい 子訳)	5,500	2007
作品社	4861820137	少年への性的虐待	リチャード・B・ガートナー (宮地尚子監訳)	3,800	2005
明石書店	4750327198	医療現場におけるDV被 害者への対応ハンド ブック	宮地尚子	2,000	2008
みすず書房	4622071501	トラウマの医療人類学	宮地尚子	3,500	2005
金剛出版	4772408158	トラウマとジェンダー	宮地尚子編著	3,800	2004
大月書店	4272350278	性的支配と歴史	宮地尚子編著	2,800	2008
岩波書店	4000027915	癒しと和解への旅	坂上香	2,100	1999*
御茶の水書 房	4275008442	死者たちの戦後誌	北村毅	4,000	2009
ちくま文庫	4480027993	赤瓦の家	川田文字	660	1994*
未来社	4624111779	アメリカという記憶	マリタ・スターケン(岩崎稔 ほか訳)	3,800	2004
名古屋大学 出版会	4815804404	記念碑の語るアメリカ	ケネス・E・フット(和田光 弘ほか訳)	4,800	2002
三省堂	4385359359	負けた戦争の記憶	生井英考	2,000	2000

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体価格	刊行
刀水書房	4887083523	ベトナム戦争のアメリカ	白井洋子	2,500	2006
講談社現代新書	4061495708	紛争の心理学	アーノルド・ミンデル(永沢哲監修/青木聡訳)	700	2001*
みすず書房	4622050285	黒い皮膚・白い仮面	フランツ・ファノン(海老坂武・加藤晴久訳)	3,400	1998
みすず書房	4622050049	地に呪われたる者	フランツ・ファノン(鈴木道彦・浦野衣子訳)	3,300	1996
岩波書店	4003233313	黒人のたましい	W・E・B・デュボイス(黄寅秀ほか訳)	860	1992
新思索社	4783511953	普及改訂版 精神と自然	グレゴリー・ペイトソン(佐藤良明訳)	2,000	2006
せりか書房	4796700436	改訂版 スティグマの社会学	アーヴィング・ゴッフマン(石黒毅訳)	2,000	2001
ちくまブリマー新書	4480687319	包帯クラブ	天童荒太	760	2006
角川文庫	4044281045	砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない	桜庭一樹	475	2009
角川文庫	4044253066	失はれる物語	乙一	551	2006
角川文庫	4042968016	燃えるスカートの少女	エイミー・ベンダー(管啓次郎訳)	551	2007
講談社文庫	4062739382	タトゥー・ガール	ブルック・スティーヴンズ(細美遥子訳)	932	2004
文春文庫	4167247010	オキナワの少年	東峰夫	388	1980*
新潮文庫	4101253329	西の魔女が死んだ	梨木香歩	400	2001
河出書房新社	4309709512	鉄の時代	J・M・クッツェー(くぼたのぞみ訳)	2,100	2008
集英社	4087734423	アフリカのひと——父の肖像	J・M・G・ル・クレジオ(菅野昭正訳)	1,800	2006
インスクリプト	4309903958	〈関係〉の詩学	エドゥアール グリッサン(管啓次郎訳)	3,700	2000*
講談社文庫	4062748155	新装版 苦海浄土	石牟礼道子著	667	2004
めるくまーる	4839700928	戦争の悲しみ	パオ・ニン(井川一久訳)	1,800	1997*
文春文庫	4167309794	本当の戦争の話をしよう	ティム・オブライエン(村上春樹訳)	648	1998
みすず書房	4622074236	アラブ、祈りとしての文学	岡真理	2,800	2008
青土社	4791762200	占領の記憶/記憶の占領	マイク・モラスキー(鈴木直子訳)	3,200	2006
双葉社	4575297447	夕風の街 桜の国	こうの史代	800	2004

出版社	ISBN(978)	書名	著者名	本体価格	刊行
白泉社文庫	4592882619 (第1巻)	Cipher(全7巻)	成田美名子	562～ 581	1997
白泉社文庫	4592884187	赤ちゃんと僕(全10巻)	羅川真里茂	600	2001～ 2002
集英社文庫	4086172189	おしゃべり階段	くらもちふさこ	618	1996*
集英社文庫	4086178211 (第1巻)	イマジン(全7巻)	槇村さとる	各570	2002
集英社文庫	4087474220	イマジン・ノート	槇村さとる	513	2002
朝日新聞社	—	YES オノ・ヨーコ展 カ タログ	オノ・ヨーコ	—	2003
講談社文庫	4062637640	グレイプフルーツ・ ジュース	オノ・ヨーコ(南風椎訳)	648	1998
淡交社	4473034151	マルレーネ・デュマス ブロークン・ホワイト	マルレーネ・デュマス(東京 都現代美術館／丸亀市猪熊 弦一郎現代美術館監修)	2,475	2007
岩波新書	4004309611	ディアスポラ紀行	徐京植	740	2005
ファイドン	4902593037	悪魔の遊び場	ナン・ゴールディン	7,980	2005
岩波書店	4000080590	人間の大地 労働	セバスティアン・サルガー ド(今福龍太訳)	14,000	1994*
蒼穹舎	4902137859	Scars	石内都	4,200	2005

*は、品切の可能性がります。